

Title	ピエール・フージェイロラ著 人間の近代化：セネガルの例
Sub Title	Pierre Fougeyrollas, Modernisation des hommes : l'exemple du Sénégal, Flammarion, Paris, 1967
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.6 (1969. 6) ,p.654(126)- 657(129)
JaLC DOI	10.14991/001.19690601-0126
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690601-0126">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690601-0126</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

ピエール・フージュイロラ著

『人間の近代化——セネガルの例』

Pierre Fougeyrollas, *Modernisation des hommes — l'exemple du Sénégal*, Flammarion, Paris, 1967.

1

1960年夏に、アメリカ・アジア学会付属の「近代日本研究会」の予備会議、いわゆる「日米箱根会議」が開かれたが、このシンポジウムを契機として、日本では「近代化論」が活発である。本書は人間の近代化を主題としているが、事例がセネガルにとられているので、日本の近代化論と無縁であることはもちろんである。

セネガルは西アフリカの旧フランス領植民地である。セネガルの事例が旧フランス領黒アフリカすなわちフランス語圏黒アフリカにまで拡張され、さらに黒アフリカ全体、アフリカ全体、今日の発展途上国一般に拡張できるが、という点、拡張するにしがたい適用される局面は狭くなっていく。しかし近代化を外から、具体的には西洋から強いられたし、強いられつつあるという点では共通の問題をもって、この点では明治維新以来の日本の近代化とも共通するものを持っている。外からの近代化を経験した日本人にとって、セネガル人の近代化問題には非常によく理解できる面がある。

これに反して、本書にはまた私にとって理解しにくいものもかなり含まれている。この原因は第一に、著者が社会学者ないし社会心理学者であるため、その手法に経済学畑の私が習熟していないということ、第二に、著者の学問がフランスの系譜を引きながら、黒アフリカの風土に育てられたためか、社会・心理学者としても独自の発想があることに求められる。ただし第二点は私の推測であって、当たっていないかもしれない。

人類学者はアフリカの伝統的社会が今日解体し崩壊しつつあることを観察し、経済学者は発展途上国の成長率が低いことを、先進国との間の所得差が拡大する一方であると指摘している。しかしながら、この両者の悲観主義の間に、社会学と社会心理学者の節度と根拠のある楽観主義の場がある、というのが著者の立場である。

セネガルは旧フランス領黒アフリカの政治的中心地であり、教育も最も進んでいた地域であるが、経済的にみれば、落花生を主要輸出品とするこの国は、隣国のコートジボワール（象牙海岸）の経済的繁栄と比較して、その停滞ぶりが目立つ。詩人大統領サンゴールが、いかに哲学的・文学的名演説をぶっても、経済開発という本来プロゾイックな問題は解決されないのではないかと思う私は、いざんとして悲観主義者である。とくにアフリカ固有の社会心理的観点からみた長所と経済学的観点からみた短所の接点について、私は日本の経験からみても、つよい疑問をもつのであるが、まず本書の構成を紹介しよう。

序章 伝統的社会から近代的社会への移行、第1章 工業就業者と近代化、第2章 学生と文化変容の問題、第3章 テレビジョンによる教育に対する女性、結論 社会心理上の近代化、が本書の構成である。

第1章の内容はダカール(Dakar)とティエ(Thies)の工業就業者についての調査である。この二つの町が選ばれた理由は、前者は人口約50万人のセネガルの首都で、内部の人口圧力と地方からの移入により、急速に拡大しつつある。この都市は港町であり、外に向かって開かれ、外国からの影響にさらされている。これに反してティエは人口7万人の海岸から西へ入った地方都市で、鉄道の要衝であり、外部に開かれていることが少ない。そこで両者を比較して近代化の相違をみようというのである。

第2章はダカール大学の学生が対象であり、第3章はダカールの女性が、テレビの教育放送をみる会を組織し、一堂に会してテレビをみたあと、討論会をするという形で、文盲であってもテレビや映画を媒介として、近代化が進行できる現象をとらえている。

調査方法はアンケート方式であり、たとえば日常生活のなかの衣服については、次表のようなアンケートを出している。

	ダカール %	ティエ %	合計 %
平常アフリカ服を着る	25	20	22
平常洋服を着る	29	10	19
平常両方の服を着る	46	70	59

この結果は、労働者たちの半数以上が両方の型の服を用いており、近代化と同時に部分的文化変容の例を示していると解釈される。そして両方の服を使用する人々は、労働する場所では洋服を着るが、家族生活と、イスラム教徒の場合には宗教的儀式の中ではアフリカ服を着用し続けている。

なおまた、アフリカ服をすてて洋服を着用する人間は、ダカールのほうがティエより多い。これは、工業と都市という二つの影響により、ダカールではアフリカ服を完全にすてさせることがティエより多く、この観点から近代化と文化変容の程度を両市間で区別することができる。

上のようなアンケートとその解釈は、アフリカ服を和服におきかえればそのまま日本にも通用する、むしろ当りまえのことであって、わざわざアンケート調査をするほどのこともないように感じる。しかし内からの近代化だけを経験し、衣服についての二重生活を知らない西洋人にとっては、この結果も日本人ほど自明のことではなく、ここにアンケート調査のフランス語での発表の意義が見出せるかもしれない。

衣服についてのアンケートとその解釈は、本書で試みられた数多くのアンケートの一例にすぎず、他のアンケートの中には、個々にはきわめて興味あるものもある。しかしこれらのアンケートの諸結果が、著者の人間の近代化についての主張を、著者が考えているほど強力に支持することになっているかについて、私には疑問が残る。次に著者の近代化論を、私の理解したかぎりでも検討してみよう。

2

著者によれば、近代化は非近代的社会状態から近代的状态への単なる移行ではなくて、むしろ永久的な技術的、経済的、社会的、知的革命であり、人間と自然との関係、人間の間の中での新しいものの発生の終りなき過程である。他方で、植民地の独立運動は先進・工業地域とそれ以外の地域との間に最近まで確立されていた関係をてんぶくし、非工業国はいわゆる近代的经济と社会の物質的基礎を作ろうと努力するよ

うになった。ここでは近代化は西洋化なのであるが、しかしまた発展途上国の多くの人間は、同時に植民地時代に奪われた社会・文化的人格を回復し、それによって完全な西洋化に身を委せることを拒否している。

西洋の今日の技術的進歩と経済的繁栄、それと発展途上国との隔差は著者も認めるのであるが、この西洋の水準は19世紀の産業革命以来の歴史的・特殊なものであり、これが全世界にとっての唯一の規範ではない。西洋のたどった近代化の道と同じものを西洋以外の国がたどらなければならないことはなく、各国が独自の道をもっている、と主張されている。

西ヨーロッパとアメリカ合衆国の近代化の四つの特徴としてあげられているものは、(1)工業生産の優位、人間の機械、技術、知識を用いての自然の征服、(2)文字が大衆の表現手段となったこと、(3)ブルジョワの支配、(4)近代的社会が民族という歴史的共同体によって組織されていること、である。

これに対して、今日の発展途上国にはブルジョワがないから、国の指導者には官吏がなるとか、映画、ラジオ、テレビの普及により、文盲にも教育することができるというようなことが、今日の発展途上国の近代化の道が西洋のそれと異なる例証とされている。

近代化には能動的なものと受動的なものがある。能動的というのは生産ないし労働に関するものであり、工場の労働者が西洋のやり方を模倣するというようなことがその例である。これに対して、受動的とは消費ないし余暇に関するものであって、たとえばトランジスタ・ラジオを聞きながら町を歩く、というのがその例である。日本的に表現すれば「アメリカナイズ」されるともいえるべきもので、コココーラを立ち飲みしたり、アイスクリームをたべながら歩いたり、ヨーヨーを踊ったりするようなものである。

西洋諸国の資本主義も初期には勤労と節約の精神を身につけた人たちによって担われたが、今日では「豊かな社会」を実現し、余暇と娯楽の社会に変わりつつある。そこで今日の発展途上国はまだ投資には貯蓄が見合わなければならず、勤労と節約が必要であるにもかかわらず、映画などを通じて西洋社会の消費行動を見せつけられ、こういう面だけを模倣するおそれがあるのは事実である。したがって著者が、アフリカの近代化にとって、能動的態度が受動的態度に打ち勝つことが望ましいとすることは理解できる。問題はその方法であって、中共のように国を外界に対して閉ざすことは考えておらず、むしろダカールが外界に開かれて

注(1) 矢内原勝「日本近代化論の系譜」『エグゼクティブ』53号、1969年2月、参照。

注(2) ダカール市民の各家庭にテレビがあると思っはいけない。

いることは与件としているし、国際協力による発展途上国援助を期待しているのであるから、文化的変容をどのようにして統制するのが問題となる。著者も受容と拒否の意識的選択の必要を説いている。

以上のことよりもっと問題となるのは、経済的・技術的西洋化は認めながら、完全な西洋化を拒否するとき、その拒否するもの、逆にいえば積極的に残すべきアフリカの伝統的なものは何か、ということである。

著者の把握している非西洋世界像は次のようなものである。アジアはその社会・文化の全体が西洋からの衝撃に抵抗し、とくに日本は植民地化から免れ、根底から西洋化することなく工業化と近代化に成功した。このようにアジア人は自分の固有の文化を維持したから、今日のアジアの解放は政治的自由である。ラテン・アメリカは植民本国人と混血することにより文化変容を全面的に成就した土地となった。したがって中・南米での解放は人種的不平等をなくす社会的自由である。アジアでもラテン・アメリカでも自主的文化を発展させる道は自由に残されていた。

これに反して黒アフリカは 20 世紀初頭に軍事的・政治的に屈服させられ、白人は主人としてアフリカ人大衆がその人間性を表現することを許さず、西洋文化に同化させる政策を押し進めた。したがって黒アフリカの解放は文化的自由である。

それならばアフリカ固有の文化、アフリカ人の人格とは何かというと、これはネグリチュード (negritude) という語で呼ばれている。ネグリチュードとは黒世界の文明価値の総合だという。サンゴール大統領もしばしばこれを強調するのであるが、その内容を理解することはなかなかむづかしい。

アフリカ人の自然に対する態度は、西洋人のように自然を征服するのではなくて、母なる大地に抱かれる子となる。すなわち自然と調和するのが特徴だという。この点は東洋人も同じであろう。問題は経済的に豊かになるために経済開発計画を実施し、たとえば大規模なダムを建設し、人造湖をつくるというようなことをやらざるをえなくなると、自然との調和という態度とどこで「調和」させるか、ということである。

西洋人は個人主義であるのに比較してアフリカ人は大家族制であり、共同体精神に富んでいるという。この点についても、東洋あるいは日本と共通である。都市に出てきた労働者が故郷と縁を切らず、休日には帰村し、村の年中行事に参加する、というようなことは日本人にはよく理解できる。しかし大家族制が社会保

障制度の発達をおくらせたり、家族のメンバーはその稼いだものを共通のプールに提出しなければならないため、勤労意欲を失わせるということもある。故郷の村への愛着、お祭、結婚式、葬式等への参加が、工業労働者の欠勤率を高くするというのも、アジア諸国で指摘されているのである。

アフリカ独自のものを主張して、それが経済的・技術的近代化と矛盾することが少ないのは芸術の分野である。アフリカの場合には文学と音楽と彫刻である。西洋彫刻の特徴が写実であるのに対して、アフリカのそれは象徴的なところにある、という。日本の彫刻・絵画もまた西洋の写実に対して象徴的といえるであろう。西洋芸術と東洋芸術は相互に影響しあってきた。アフリカ芸術もまたきわめて魅力的であり、世界の芸術にすでに影響しつつある。

伝統的な風俗・習慣にも保持したほうがよいものもある。日本人にとってお雛祭とか七夕とかお月見などの伝統的な行事がある。これらが消滅することは惜しい。問題は保存するための費用である。洋服より和服のほうが高いし、近代的な生活の中で和服なしですますことはできても、洋服なしですますことはできない。だから和服を着るということは費用のかかる衣服の二重生活を意味する。インド女性が工場で労働するのは珍しいが、私のみたカルカッタのミンソ工場では、サリを着た女子工員がいた。しかし満員の通勤電車に乗らなければならないなら、彼女らもサリを脱がざるをえないであろう。

日本人の結婚式は花嫁は和服だが花婿はたいてい洋服、それも式の時間が昼でも夕方でもモーニングである。西洋人の眼からみれば披露宴はいいアイデアだと感心しても、花婿のモーニング姿は何ともこっけいに映るにちがいない。しかも式そのものは近代的ホテルの一室に設けられた、伝統的の神の前で行なわれるのだから、西洋の社会学者にとっては文化変容の好箇の題材となる。しかし日本人にとっては、こういう結婚式の形式が形成されたのは、それだけの理由があるからであって、つまりは便利だということである。こういう類いの文化変容は心配するほどのことはない。西洋人はスープをのむときに音をたてることを非常にいやがる。そのかわり女性でも皿で両手がふさがってれば、足でドアをあけることは平気である。日本人は西洋人の、日本人からみれば行儀のわるい、あるいはわるいと思われていた点ばかりを模倣しがちで、その結果日本流にも西洋流にも行儀がわるくなるのは歎か

わしいことではあるが、これもそう重大なことではないだろう。

著者のいうアフリカ人の近代化は、明治維新当時の和魂洋才を思わせる。ネグリチュードは上に述べたような単なる風俗・習慣ではなく、文化的精神を意味している。日本の旧陸軍は経済的に貧困だったためもあるが、精神主義であった。一定の面積に弾を何発打てばどれくらい当たる確率か、というような発想を排し、目標をみつけたうえで一発必中で打てという。そして結局は戦争に敗れた。また西洋の物質面だけを摂取し、西洋文明の基礎をなしているヘブライズムとヘレニズムを拒否したため、たとえば近代的な賃金の観念がなかなか育たないことになった。

このような経験をもつ日本人にとっては、アフリカが世界にその独自性を誇るべき社会・心理的伝統主義は経済面での近代化と著者が考えるほど容易に結合できるとは思われない。

世界の中で日本国の果すべき使命を考えた人に、たとえば内村鑑三とか新渡部稲造がある。平和憲法をもつ日本が、全世界が武器を棄てて真の平和世界を実現する方向を示す、というところに、日本の使命をみた人もいる。しかし今日の日本の政治家にはこのような理想は欠除しているようにみえる。これに比べて、宇宙の秩序にひそむ力との協力、創造の精神、共同体的連帯などにアフリカ人の独自の価値を求め、近代化を先導したヨーロッパがいまや超近代化の中で非人格化、画一化の危機にさらされているとき、アフリカ人ないしセネガル人は世界の人に行くべき道を示そうという、本書に説かれている使命観は尊重すべきであろう。

矢内原 勝

ジェームス・I・ナカムラ著  
宮本又次監訳

『日本の経済発展と農業』

(1) 本書は「Agricultural Production and the Economic Development of Japan 1873—1922 (Princeton University Press, Princeton, New Jersey 1966)」の翻訳である。著者のジェームス・ナカムラ氏は 1952 年にコロンビア大学を卒業され 1964 年同大学の博士号を取得されている。現在はコロンビア大学経済学部助教授であるとともにニューヨーク・シティ大学、ハ

ンター大学、アデルフィ大学でも講義をもたれ「日本経済論」を中心とした「比較経済発展論」の講義を担当し、又東亜研究所員でもある。本書は氏の学位論文を改訂したものであり、その一部はウィリアム・W・ロックウッド編「The State and Economic Enterprise in Japan (Princeton University Press 1965)」にも掲載されている。

氏の分析は、従来の研究者(日本人、外国人を問わず)がよって立つ所の明治初期政府公式統計の信憑性を検討し、果敢にもそれを修正することによって明治期日本経済についての従来の一般化した理解へ挑戦を試みた所にその中心があるといってよい。氏は、明治初期の、租税を回避せんとする農民の行動が生産についての公式統計を著しく歪めたであろうとし、租税回避の行動によって生じた過小報告分を修正することによって現実の生産諸数値を算出しているのである。従って、ナカムラ修正値は従来の未修正公式統計によった諸数値よりも、過小評価分を修正してあるために当然高くなっている。このことは幕末期、明治初期に日本は既にかかなり高位な農業発展を遂げていたとするものであり、低位な段階から高位な段階へと急激な発展をなしたとする「スパート説」を制止させることになる。

以下、各章の簡単な紹介を行うが、氏のこの著作は多くの示唆に富み、今後検討すべきいくつかの問題を提起している。

(2) 各章の内容は次の通りである。

- 第1章 序、要約、結論
- 第2章 耕地の隠蔽
- 第3章 耕地の過小測量
- 第4章 収穫量の過小報告
- 第5章 農業生産修正推計と成長率
- 第6章 既存農業生産推計と修正推計との比較
- 第7章 日本の経済発展における農業
- 付論 1, 2.

本論全7章のうち4章まではもっぱら従来研究者が用いてきた明治前期の政府統計が、農民の租税を回避せんがためにとる行動によって如何に過小評価されたものであったかを明らかにするためにあてられており、5章以下は修正推計による農業生産成長率、経済成長率の算出、あるいは明治期の経済発展における修正推計が示す意義のためにさかされている。

第2章の要旨

地租を少しでも回避せんとして農民がとる行動に